

生活を実感し、工夫する楽しさを味わう子どもを育む家庭科学習

～学習を生活に生かそうとする子どもの姿をめざして～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうこと等を扱っていく。学習対象は、子どもたちにとって身近な家庭生活や家族、学校生活や仲間などの身近な人やもの、自然などの環境である。自分の家庭生活からスタートし、学んで身に付けた力を日々の生活で実際に生かしていくという、授業と生活の間で学びが連続していることが大切となる。学んだことが、毎日の暮らしの中で役に立っているという実感を子どもたちがもてたときや、家族に喜んで受け入れられたり評価してもらったりしたときに、一層意欲的になったり自信を持ったりする姿につながると思われるからである。

昨年度、「自らの生活を実感し、工夫する楽しさを味わう家庭科学習」という研究テーマに“自分の課題をもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして”というサブテーマを設けた。自らの生活を実感することから、自分の課題をもち、学習対象にはたらきかける子どもの姿を期待し、題材を計画することに力を入れてきた。学習活動に、生活の中での必要性や重要性を感じた子どもたちが、自分の思いを真剣に伝え合ったり認め合ったりする姿を“互いのまなざしが共鳴すること”と、とらえていたからである。

今年度の学校提案「互いのまなざしが響き合う学習」とは、子どもどうしが互いの思いをより印象深く伝え合ったり、思いをぶつけ合ったりする中で、高まりあい、分かり合っている集団学習の学びの姿である。学校提案とかがわって、家庭科では昨年度に引き続き、子どもが自らの生活を見つめなおして、学習対象に向かって自分が必要な課題、すなわち自分の「まなざし」を明確にもつことからスタートさせていきたい。課題を解決し、よりよい生活を考えていこうと追究する子どもが、自分の思いを真剣に伝えたり、友達の「まなざし」に寄り添いながら共感したり、「なるほど」と納得したりする子どもどうしの姿から「まなざしの響き合い」が生まれていくと考えるからである。

「互いのまなざしが響き合う」ことによって、自己の変容を実感した子どもたちが、日々の生活の中で実際に生かすことが出来た時、満足感や充実感を得ることが出来るだろう。子どもの「まなざし」をしっかりとみとり、学習したことを自分の生活の中に生かせるよう支援していきたいと考え、今年度の研究テーマを「生活を実感し、工夫する楽しさを味わう子どもを育てる家庭科学習」とし、サブテーマを“学習を生活に生かそうとする子どもの姿をめざして”とした。

(2) 家庭科でめざす子ども象

家庭科の授業といえば、調理実習や製作実習というイメージをいただいている子どもが多く、授業で取り入れる体験活動や調理実習、製作実習への関心は高い。このような活動を取り入れた学習は、子どもたちにとって楽しみなものであり、すすんで工夫を凝らしながら学んでいく姿を見取ることができる。例えば、調理実習であれば「おいしいものを作りたい」「盛りつけ方をかわいらしくしよう」などという思いをもって、自主的によりおいしい・より簡単だと思われる作り方を調べてきたり、家庭で試し調理を行ってきたりする子どもの姿もみられる。毛糸で編んだ小物作りを行うと、自分のイメージしている作品に近づけていくよう、色や形を考えたり飾り付けを行おうとする。

体験活動や実習などの活動への関心は高いものの、毎日の生活の中で当たり前のように行われている衣食住などの生活行為・活動に対して、子どもたちはあまり意識しないですごしていることが多い。例えば、自分が着ている衣服の役割について考えてみたり、自分の住まい方について考えたことのある子どもは少ない。「買って、使って」「何となく暮らしている」というのが実態であろう。いつでもどこでもほしい物が手に入る、便利で簡略化された生活を送っている結果、あまり生活を「意識」することなく過ごすことが可能となっているのである。

その結果、多くの子どもが、家族の一員として自分の役割を考える機会をもつことなく、家族とは「空気のような」「あたりまえの」存在だととらえてしまいがちである。子どもとの会話の中でも、お家の人に「～してもらったよ。」「～したら、喜んでもらえたよ。」という声よりも、「～してくれなかった。」「～しなさいとうるさく言われる。」等という声を聞くことも多い。家庭科学習の中で、家族にも個々の立場や事情があることに気づくことや、互いに精神的絆で結ばれているかけがえのない存在であることを感じてもらいたい。以上のことから、家庭科学習でめざす子どもの姿を次のように考えた。

◇ 意欲的に取り組む子ども

主体的に考え、行動できる子ども

◇ 学習活動の価値を実感できる子ども

自分のはたらきかけがよりよい生活を創り、将来にまでつながるという学習の価値を実感できる子ども

◇ 自分の課題（問いや問題意識）にこだわって活動できる子ども

子どもたちの家庭生活は個々様々であり、それぞれの課題は異なるものである。自分にふさわしい課題を見つけ、自分自身や自分の家庭に合わせた問題解決へと、こだわりをもって思考をこらす子ども

◇ よさを実感し、生活に生かそうとする子ども

家族や家庭生活を大切に思い、よりよくしたいとねがいながら、家族の一員として、自らの生活にはたらきかけをしようとする子ども

2. 家庭科における「互いのまなざしが響き合う学習」

家庭科学習において、子どもの「まなざし」とは、学習対象や自らの家庭・家族に向けられる子どもの思いやねがい、それぞれがもつ課題、課題を解決しようとする意志や姿勢であるにとらえている。個々の子どもの「まなざし」が、より真剣なものとなり、どのような形で自分の生活に生かしていけるのかを、集団学習の中で伝え合い、刺激し合い、互いに影響を与え合う学びの繰り返しが「響き合う学習」を創っていくこととなる。

昨年度の実践、『衣服を気持ちよく』では、“布には空気が含まれている”ことを柱にして題材を計画し、布の性質を確かめ合い、よりよい着方を考える学習を行った。

第1次「わたしの着方、さわやかに」では、布の構造による性質の違いや重ね着の仕方に着目し、涼しい服の着方、暖かい服の着方を学習した。そして、自分たちが学習したことを、実際に表現してみることを目的に、ファッションショーを開いた。グループごとに、“あたたかい服の着方”“涼しい服の着方”をテーマに、工夫を凝らした着方を練り合った。布の性質や色、デザイン、等を考慮するのはもちろんのこと、「自分は寒い冬でもスカートを着たいから」「夏は暑いから肌を出したいけどUVカットも気になるから」など、自分たちの思いも反映しながら、よりあたたかく、より涼しくとの工夫を凝らした発表となった。そして、発表の場では自分たちのこだわりを伝えながら、「あのアイデアおもしろいね」と互いの思いを認め合ったり、「冬は、衣服にマフラーや帽子・手袋などの小物を使うと、よりあたたかい空気を逃がさないからいいね」と納得し合ったりする姿が見られた。暑さに弱い子どもは、涼しい着方にはより真剣になるし、寒がりな子どもは、暖かい着方により真剣となる。友達の見解を聴くことによって、さらに自分の考えに確信がもてたり、時には変容したりすることにもなるだろう。友達の「まなざし」に、自分の生活を重ね合わせて寄り添ったり、自分の「まなざし」を仲間に伝えようとしたりする、子どもたちの真剣な「まなざし」が、より印象深く伝わり合う学習が、家庭科学習における「互いのまなざしが響き合う学習」であるにとらえている。

3. 研究の展望

(1) 題材の設定について

題材を設定するにあたっては、ごく一部の指定された題材をのぞいて、ほとんどは子どもの実態と照らし合わせながら、自由に身近で日常的な題材を設定できることになっている。例えば、調理に関してであれば、「米飯およびみそ汁の調理ができること」をのぞいては、「日常よく使用される食品を用いて簡単な調理ができるようにする」という内容となっており、子どもの実態に合わせて弾力的に内容を組み合わせ、計画していくこととなっている。

子どもの「まなざし」を、学習対象にどのように向かわせていくのか、題材の設定が大きなポイントとなる。子どもや地域、学校に対応した、子どもにとって身近で、必要性・重要性を感じられる題材を設定し、子どもが問題意識をもてる発問を提示を行うことが大

切である。また、そうすることによって自らの生活を実感し、生活のよさや自らの課題を発見する子どもの姿につながりやすいと考えられるからである。

研究テーマとかかわって、子どもの実態をふまえながら、めざす子どもの姿にせまるための手だてとして、以上の3点を大切にしながら題材の設定を行いたい。

- ①適切に体験活動や実習を取り入れ、「おもしろそう」「やってみたい」と、子どもたちの興味・関心を高められるよう工夫する
- ②五感を通した直接体験をできるかぎり取り入れながら、実感を伴った具体的な学習を展開する
- ③資料やグラフを利用しながら、実際の数値やその変化を示したり、実験を取り入れたりと、根拠のある科学的な見方を大切に、自分の生活への必要性・重要性を感じられるような学習を展開する

体験活動や実習を取り入れていこうとすると、子どもたちは意欲的になるが、授業時数が不足してしまったり、活動目的の授業となってしまうがちである。昨年度の実践、「衣服を気持ちよく」では、布の構造を実感するために、編物を用いた“あみぐるみ”、織物を用いた“プロミスリング”作りの実習を取り入れた。その際、授業ではどちらか一方の実習のみとした。もう一方の実習については、子どもたちの希望もあり、休けい時間や放課後を利用して行えるようにしておくこととした。結果、子どもたちどうしが教え合い、自分たちの工夫を伝え合ったりする姿を見ることが出来たのである。このように、体験活動や実習を工夫しながら効果的に取り入れていきたい。また、活動が目的になってしまうのではなく、学習の意味を実感した家庭科の学びが展開されるよう、学習課題を明確にするよう心がけたい。

（２）個人の学びと集団の学び

「互いのまなざしが響き合う学習」を展開するために、自らの生活を振り返り、課題を見つけて追究していく個人の学びと、集団での追究や交流を通しての集団の学びを、意図的に構成していきたいと考える。個人の学びを深めることによって、それぞれが学習対象に向ける「まなざし」がより真剣なものとなるよう、一人一人の子どもとの対話を大切にしながら、しっかりとみとっていきたい。また、家庭での様子も聞かせてもらえるよう、保護者との連携も密にしていきたい。

互いに真剣な「まなざし」を交流し合う集団での学びの中では、友だちとの「まなざし」をすりあわせ、よりよいアイデアや工夫が出されたり、新しい気づきが生まれることになるだろう。そして、題材の意味を獲得するための学習活動を展開していく中での、ひとりひとりの子どもの変容や学習の深まりをみとることが、評価となる。